

# 第1章

## 米国議会図書館所蔵南満州鉄道株式会社関係資料の保管と利用について —「所蔵資料の堆積」から利用のための「コレクションの構築」へ—

伊 東 英 一

(米国議会図書館アジア部司書)

はじめに

- I 米国議会図書館における「満鉄資料」の定義と範囲
- II 米国議会図書館所蔵に至る経緯
- III 移管後の整理・保管（堆積から構築へ）
- IV 1946-93年の整理・保管
- V 1994-96年の整理・保管
- VI マイクロフィルム化による資料保存の試み（1960年代から2003年）
- VII 2004年以降、現在にいたる整理・保管（コレクションレベルカタログによる整理）  
今後の課題—むすびにかえて—

はじめに

「全世界・人類の知的遺産と創造性を未来の世代のために保存する」という使命を掲げ、世界最大のコレクション規模を誇る米国議会図書館（以下 LC と略す。）には、2008年現在、460言語にわたる1億3400万点の文献資料等が所蔵されている。日本語コレクションはアジアのコレクションの中でも最大の116万点を数える。本稿では、国際ワークショップ「日中米における関係資料等の利用と保存をめぐる諸問題」（日本貿易振興機構アジア経済研究所、2008年3月8日）でのLC所蔵の満鉄関係資料についての報告及びそれに対するコメント、質疑応答を基に不明な点、また明らかになった点を含めて報告することを主目的とする<sup>1</sup>。LCに所蔵されている、南満州鉄道株式会社（The South Manchuria Railway Company）関係資料についてはLC司書、またその資料の利用者である外部研究者による所蔵資料調査が1970年代初頭より漸次行われている経緯があり、その報告等は目録・文献解題として発表されてきている。また、書誌・所蔵情報及び一部資料画像を含むデータベースがアジア経済研究所のウェブ上で公開されており、全貌とはいえないまでもその姿がある程度明らかにされていると考える<sup>2</sup>。本稿では、こういった調査結果に触れながら、その時点で所蔵が明らかにされなかった資料群について紹介することによりLC所蔵南満州鉄道株式会社関係資料の全体像をより包括的に描く試みの一助となれば幸いであ

る。

## I 米国議会図書館における「満鉄資料」の定義と範囲

LC においては「満鉄資料」を広く捕らえて、満鉄作成・刊行文献文書及び満鉄旧蔵文献文書（日本語、中国語及び他言語）の両方を含めて満鉄資料と称することがある。LC の日本語コレクション及び中国語コレクションには後者の資料群も多数所蔵されており、これらの資料について、またそれを一次資料とする調査研究とそれに基づく議論をする場合には、何をもって「満鉄資料」というのかについての共通認識を前提としなければならないと考える。満州研究並びに満鉄の調査及び企業活動の専門研究者から見れば、前者の定義・範囲である「満鉄作成・刊行文献文書」をもって満鉄資料とするのが既定の了解事項ではないかと察せられるが、満州研究、特に満鉄の研究を包括的に進めるという視点にたてば、満鉄がどのような資料を収集・収書し、企業・調査活動に使ったのかという視点も重要になるのではないとも考えられる。以上のことから、本稿では両者を含めて「LC 所蔵満鉄関係資料」と称することにしたい。LC 所蔵満鉄関係資料の中には満鉄自体の作成・刊行文献文書かどうかにかかわらず、満鉄の所蔵を示す満鉄蔵書印が押されている。ただし LC のオンラインカタログ（以下 LCOPAC と略す。）上の書誌情報には、個々の資料が整理・カタログされた時期にもよるが、必ずしも蔵書印の有無が記録されているわけではない。上述の満鉄旧蔵資料をその一次資料として調査研究を進めるには以上のような理由から、実際の資料一点一点にあたって、所蔵経緯を調べなければ全体像を掴むことが出来ないのが現状である。

その規模については、日本より接收された満鉄関係資料で日本に返還されたものはなく、全体のうち約 70 パーセントは LC に所蔵されているという指摘がある<sup>3</sup>。その資料内容は満州の地理・地勢、自然資源をはじめとする報告及び政治、経済状況に関する分析報告書など多岐に亘っている。なお日本国内では、アジア経済研究所図書館と国立国会図書館が、LC でマイクロフィルム化された資料については現在まで継続的に収集し、日本国内の研究者、一般利用者にその提供を行ってきていることは周知のところであろう。

## II 米国議会図書館所蔵に至る経緯

満鉄関係資料が Washington Document Center (WDC) を経て LC に所蔵されるに至った経緯については、IV-VI に掲げる論文・報告に既に詳説されているので、本稿ではその経緯について以下に簡単にその概略を記すにとどめる。

WDC は 1942 年に接收された日本語文書の翻訳を主目的として米国海軍により創設され、1945 年以降 The Allied Translator and Interpreter Service (ATIS) と協同し、日本政府各機関、帝国陸・海軍をはじめ関係組織等から文書、文献、雑誌、新聞等を接收しワシ

ントンに送付した。1946年以降 WDC は、The Central Intelligence Agency (CIA) の前身である The Central Intelligence Group (CIG) の管轄下に置かれ、1947 年半ばにはその主なる調査使命を終えた。1947 年 9 月 18 日に CIA の管轄下に組織換えされた翌年に、(1) 文書類は The U.S. National Archives and Records Administration (NARA) に、(2) その他資料、主に定期刊行物及び書籍については LC に移管されることとなった。移管されたものの点数は、15 万 7685 に及ぶとも記録されている<sup>4</sup>。元 LC 司書である吉村敬子氏によれば、1948 年から 49 年にかけて、郵便用大型布袋にして 3000 余り、「概算 29 万点の出版物」が書庫に所蔵された<sup>5</sup>。さらに、LC に移管された文献（書籍）の数を明記するものとしては、接收され WDC 経由で LC に移管された文書文献 6 万 4000 点のうち「数千冊の日本語図書」の一部は 1953 年の時点において既に LC のコレクションとして整理、所蔵され、複数部については米国内の他の図書館に送られたとの記録もある<sup>6</sup>。

### III 移管後の整理・保管（堆積から構築へ）

満鉄関係資料に限らず、一般に資料群を研究のために効率的に使えるようにするには、何がそこにあるのかという基本的な書誌・所蔵情報が概観できることが求められる。また最終的には資料の所蔵機関が検索方法、あるいは資料情報が含まれている媒体（文書またはデジタルフォーマット）を提供することが最低限必要となるのは明らかである。LC に移管されてきた満鉄関係資料は、図書館・情報学の考えからすれば、いわば収集から所蔵、利用者への情報へのアクセスの提供を体系的に考え、意図的、積極的に努力が注がれた「コレクションの構築 (collection development)」という望ましいモデルには当てはまらない。接收によって収集され、WDC その他アメリカ政府の諜報機関などを經由して LC に移管されたこの資料群は、「何を、どのように」収集し、整理し、利用者・研究者に提供するのかといった図書館の意図的な作業を意識して所蔵されるにいたったものではないからである。いわば「コレクションの構築」というよりは「資料の堆積 (accumulation)」とでもいえる過程を経てきたものである。資料が利用されることを最終的な目的とする過去 60 年の整理・保管は「堆積」から「構築」への推移過程であると捉えたい。

以上の視点に立った上で、LC 所蔵満鉄関係資料の整理・保管を、(1)1946-93 年、(2)1994-96 年、及び(3)1997 年以降という時期に分け、その保管と利用について報告したい。

### IV 1946-93 年の整理・保管

LC 内の目録記録から判断すると、満鉄関係資料のうち日本語図書・書籍については 1953 年の時点で一次的な選択がされ、複数部数のものは他の研究図書館の日本語コレクションに引き取られるなどの措置がとられた後、LC の日本語コレクションの一部として整理・配

架され（インターファイル）、一部が既に利用できる状態になっていたというように考えられる。この資料群については、当時カードカタログでの検索が可能であったし、また現在では LCOPAC に、その書誌・所蔵情報が一般のコレクションの資料と同様に記録されている<sup>7</sup>。LC スタッフによる整理の試みは、(1)対象資料、言語、形態（図書、文書、地図、写真等）による仕分けが、(2)目録作成、その公表・出版とインターネット上でのオンラインカタログを通じての書誌・所蔵情報の公開という形で行われた。(1)については、原則的にはアジア部の所管になるものは書籍・図書形態のみとされ、それ以外のは地理及び地図部（Geography and Map Division）、プリント及び写真部（Prints and Photographs Division）へとそれぞれの適切なコレクションに移管する作業がすすめられた。

繰り返しになるが、図書館の使命として所蔵資料、特に WDC コレクションのように「堆積」された一次資料を研究のために利用できるようにするには、何がそこにあるのかという基本的な書誌・所蔵情報を提供できることが前提となる。情報提供に向けた接収文献文書の目録・文献解題の出版については、外部研究者、日本研究図書館及び国立国会図書館からの協力を得て実現されてきた。以下の3点の文献目録がその成果である。

*Manchuria: An Annotated Bibliography*. Washington, DC: Reference Department, Library of Congress, 1951.

Yoshimura, Yoshiko comp., *Censored Japanese Serials of the Pre-1946 Period: A Checklist of the Microfilm Collection* = 検閲和雑誌（1945年以前）：マイクロフィルムチェックリスト. Washington: Library of Congress, 1994.

Yoshimura, Yoshiko comp., *Japanese Government Documents and Censored Publications: A Checklist of the Microfilm Collection* = 日本の公文書及び検閲資料(1954年以前)：マイクロフィルムチェックリスト. Washington: Library of Congress, 1992.

また以下に掲げるように、この時期に日米の専門研究者による実地調査を踏まえた資料の目録・文献解題の発表・出版は、現在に至るまで LC 所蔵の満鉄関係資料を検索する上で貴重な情報源、手引書となっている。

アジア経済研究所図書資料部編纂、『旧植民地関係機関総合目録—南満州鉄道株式会社編—』アジア経済研究所, 1979.

アジア経済研究所図書資料部編纂『旧植民地関係機関刊行物総合目録—満洲国・関東州・南満洲鉄道株式会社編 索引編—』アジア経済研究所, 1979.

井村哲郎, 「GHQによる日本の接収資料とその後」『図書館雑誌』74(8) 1980: 375-379.

井村哲郎, 「GHQによる日本の接収資料とその後-2-」『図書館雑誌』75(8) 1981: 466-469.

井村哲郎, 「『旧植民地関係機関刊行物総合目録』満洲国・関東州編、満鉄編補遺」『アジア経済資料月報』34(11) 1992: 97-136.

井村哲郎, 「満洲国, 関東州関係団体会社刊行資料目録」『アジア経済資料月報』35(7)

1993: 91-140.

Young, John, *The Research Activities of the South Manchurian Railway Company, 1907-1945: A History and Bibliography*. New York: East Asian Institute, Columbia University, 1966.

## V 1994-96年の整理・保管

1993年から96年にかけて、議会図書館長のジェームス・H・ビルントン博士 (Dr. James H. Billington, The Librarian of Congress) の指揮の下、LC全体の未整理の資料 (arrearage と称される未整理・未カタログの資料) の見直しと整理、カタログ作業を進める事業が全館の取り組みとして行なわれた。その中の対象図書・資料群のひとつとなったのが、満鉄関係資料を含むWDCコレクションである。LCスタッフによる約6000冊の未整理の文献文書の整理・カタログ作業が行われ、この資料群については、現在「MMTKK」というキーワード検索で5300程度の書誌レコードを抽出することができる。またこの過程で見つけることのできた同一タイトルの複数点数については、LCに3部保管することとする方針も確認された。1996年には、Japanese Rare Books と称される約5500タイトルを超える古典籍の整理とオンライン上のカタログ作業の本格化が始まった関係で、この時期にはWDCコレクションに関しての整理の停滞があったのも事実である<sup>8</sup>。この時期に前後して、LC所蔵満鉄関係資料を調査した研究者によって発表された目録・文献解題は次に掲げるものがある。

井村哲郎, 『米国議会図書館所蔵戦前期アジア関係日本語逐次刊行物目録 = *An Annotated List of Japanese Periodicals on Pre-war Asia: The Holdings of the Library of Congress*』アジア経済研究所, 1995.

## VI マイクロフィルム化による資料保存の試み (1960年代から2003年)

満鉄関係資料を含めてWDCコレクションのマイクロフィルム化も1960年代から70年代にかけて、また1980年代から2000年代前期にかけて、中断の時期をはさみながら行われてきた。MJ または MOJ で始まる請求記号がつけられている資料群である<sup>9</sup>。詳細については以下のチェックリストと報告を参照されたい。

Library of Congress, and Yoshiko Yoshimura, *Japanese Government Documents and Censored Publications : A Checklist of the Microfilm Collection* = 日本の公文書及び検閲資料 (1954年以前) . マイクロフィルムチェックリスト. Washington: Library of Congress, 1992.

Library of Congress, and Yoshiko Yoshimura, *Censored Japanese Serials of the Pre-1946 Period: A Checklist of the Microfilm Collection* = 検閲和雑誌 (1945年以

前) : マイクロフィルムチェックリスト. Washington: Library of Congress, 1994.  
Yoshimura, Yoshiko, *Pre-1956 Japanese Documenta and Censored Materials: A Checklist of the Microfilm Collection of the Library of Congress* = 1955年以前の日本語文書及び検閲資料 : 米国議会図書館マイクロフィルム化資料チェックリスト. Washington: [Yoshiko Yoshimura], 2002.  
吉村敬子. 『米国議会図書館日本課の WDC コレクション』 *Intelligence*, no. 10 (2008) : 12-19.

## VII 2004年以降、現在にいたる整理・保管 (コレクションレベルカタログによる整理)

利用者の立場からは、図書館所蔵資料の書誌・所蔵情報は複数の情報源、データベース等に分散して記録されるのではなく、ひとつのデータベースに集積されていることが望ましい。一般に現在の図書館情報システム、データベース上ではキーワード、主題分類を使つての検索が可能であり、何を検索し利用したいかが明確であれば、探し求める資料に辿り着くために費やす時間は最少で済むと考えたい。LC 所蔵の満鉄関係資料についても、LCOPAC という一元化されたデータベースで資料一点一点毎に網羅的な検索ができるというのが理想の姿ともいえる。さらに、そのひとつのデータベース内において、一単位の書誌・所蔵情報、言い換えればひとつひとつの資料が容易に検索できるというのが望ましい。

LC 所蔵満鉄関係資料については様々な要素が絡み合い、上述の望ましい姿の実現が難しいのが現状である。その要素のひとつに LC での書誌情報を記録する (カタログ) 際、どの程度まで書誌情報を詳しく深く記録するのか、また資料を一点一点記録するのか、それとも個々の資料を主題、年代、著者 (作成者) などによって一群と捉え、それを一単位として書誌情報を記録するのかといった判断が下されなければならないということがある。LC の歴史上、先例のない大規模な資料群として、「堆積」されるに至った満鉄関係資料についても例外ではない。この大規模な資料群のうち、一般の日本語コレクションにインターファイルされず、残された文献文書を記録し整理するための方策として採用されてきたのが、コレクションレベルカタログ (Collection Level Catalog、以下 CLC と称する。) である。一群の資料をひとまとまりのコレクション、グループとして分類整理し、そのグループを書誌情報の 1 レコード単位として記録するというこの方法は、その資料群に関する特定の組織、また特定の人物について、歴史的な調査・研究を行う利用者にとっては意味があると考えられる。一方、それ以外の研究者・利用者にとっての資料検索の便宜という点からすると問題がある。一般に多くのアーカイブ・文書館で、文献文書がこのコレクションレベルカタログによって整理されているのは、「各々のマニュスクリプト、文書がつくられた背景のなかでこそ、その資料が理解される」という認識に起因するのであろう。ただし、LC 所蔵満鉄関係資料がどのような研究のために利用、参照されるのかという

研究者の視点に立ち、LCOPAC を使った資料検索の便宜性を考えると、一点一点の文献文書単位ではなく、コレクションレベルで一群の資料が記録されているという整理は必ずしも理想的とは言えないのも事実である。CLC の書誌レコード内には、ひとつの資料群として纏められた個々の文献文書のタイトルのみが、注記 (note) として記録されている場合があるが、それ以上の情報は記録されていないのが現状である。

利用者への書誌・所蔵情報提供は、所蔵資料へのアクセスを保障する前提としての必須のものであるというのは、図書館関係者にとっての基本的な共通認識である。これを前提にして、LC でも LCOPAC 上にその情報を公開する努力が続けられている。その結果として、1970 年代から 90 年代にかけて行われたアジア経済研究所が行った調査の時点では含まれなかった文献文書についても、CLC により整理され LCOPAC によりその資料群の所蔵をある程度検索することができるようになっている。たとえば、キーワード検索 (“CLC” 及び “Mantetsu chikuji kankobutu”) では CLC により整理・記録された「満鉄逐次刊行物」と称される資料群 (1485 点を含む 15 資料群) の所蔵が検索できる。また “CLC” 及び “kyu mantetsu shiryō” をキーワードとする検索では、「旧満鉄資料」と称される 6 資料群を抽出することができる。また、LCOPAC の機能として、Unicode 対応のアップグレードがされたことにより、日本語によるタイトルその他の書誌情報が記録されている場合には、その情報をオンライン上で見ることもできるようになっている。

#### 今後の課題—むすびにかえて—

「コレクションの構築」という過程を経て、研究者・利用者の資料へのアクセスをさらに容易にするという目標、さらに資料に基づく研究活動を援助するという目標に向けて、LC として今後取り組む必要のある課題を以下に掲げ、本稿を結ぶこととしたい。

- (1) MJ 及び MOJ の請求記号がつけられたマイクロフィルム化された文献文書の書誌情報のリスト化と公開。LCOPAC 上では MJ 及び MOJ の網羅的な検索、リスト化が現在のところ不可能であるため、補完的なリスト等による書誌・所蔵情報の提供が必要である。
- (2) 資料のリフォーマット。オリジナルの紙媒体の保存環境を整備しながらも、資料内容の重要度などを勘案したマイクロフィルム化や電子媒体への情報の移行 (リフォーマット) を進める。
- (3) シンポジウムの開催援助。LC 所蔵満鉄関係資料を一次資料とした実証的研究成果の情報の把握という意味からも、シンポジウムまたは討論会など、学術的会議の開催の援助をする。

満鉄関係資料の保管と利用を促すことは、まさに「全世界・人類の知的遺産と創造性を未来の世代のために保存する」という LC の使命を果すことに繋がる。今後とも、このユニークな資料の利用に興味のある研究者をはじめ、図書館及びアーカイブ関係者の協力を戴ければ幸いである。

(2008年10月29日)

---

<sup>1</sup> 報告の機会を与えてくださった日本貿易振興機構アジア経済研究所、またコメンテーターとして質問と助言を寄せてくださった井村哲郎、川島真、小島浩之教授に感謝の意を表したい。

<sup>2</sup> 日本貿易振興機構アジア経済研究所, デジタルアーカイブス「近現代アジアの中の日本」, アドレス: [http://opac.ide.go.jp/asia\\_archive/index.html](http://opac.ide.go.jp/asia_archive/index.html) (accessed October 29, 2008). 目録、文献解題については、本稿後述を参照されたい。

<sup>3</sup> Sadao Asada, ed., *Japan and the World, 1853-1952: A Bibliographic Guide to Japanese Scholarship in Foreign Relations*. New York: Columbia University Press, c1989: 41.

<sup>4</sup> Letter, Verner Clapp, Acting Librarian of Congress to G. Bernard Noble, chief of the Division of Historical Policy Research, Department of State, 22 January 1945, NA, GA 59, Decimal 894.423/1-2254, Central Decimal File 1950-1954.

<sup>5</sup> 吉村敬子, “米国議会図書館日本課のWDCコレクション,” *Intelligence*, no. 10 (2008): 12-19.

<sup>6</sup> Letter, Samuel D. Berger to Franklin Hawley, 24 November 1953, Decimal 894.423/11-2453, Central Decimal File 1950-1954, NA, RG 59.

<sup>7</sup> 現在ではLCOPAC上でUnicodeの対応がされているので、日本語の書誌情報が含まれている場合には、日本語でのタイトル、キーワード等による検索が可能ではあるが、日本語資料のすべてにローマ字による(ヘップバーン式)情報と日本語(かな、漢字表記)情報とがともに記録されているとは限らないので注意を要する。特に、1980年代以前に目録情報がとられた資料については、ローマ字のみの情報が提供されているのが原則となっている。したがって、LCOPACでの検索にあたってはローマ字による検索をすることが必要である。

<sup>8</sup> 日本語コレクションの古典籍には、WDCコレクションとして看做されるべきものも多くある。旧陸海軍等をはじめとするコレクションには明治時代以前の書籍が多く含まれており、その事実、経緯は蔵書印によって確認できる。例えば和算、測量に関する古典籍の中には、「陸軍士官学校図書印」といった情報もオンラインカタログ上のレコードに含まれている。

<sup>9</sup> マイクフィルム化事業については元LC司書の吉村敬子氏による計画・事業化と藤代真苗氏等の撮影に先立つ資料の整理、カタログ作業に負うところが大きい。